

津軽南部震源の群発地震

「小規模も注視必要」

弘前大学大学院 前田教授



前田拓人教授

15日午後0時9分ごろ、弘前市中心部から西側、岩木山の南南東の地域を震源とする地震があり、西目屋村で最大震度3、弘前市で



震度2を観測した。14日も同地域を震源とする地震が2回立て続けに発生。地震学が専門の弘前大学大学院理工学研究科の前田拓人教授は、今回の群発地震について「震源地域ではここ5〜10年で地震が増えており、地震活動が活発な状況が続いていた。ただ、私たちが揺れを感じる地震は少なかった」とした上で、「規模としては小さいが、しばらくは同程度の地震が起きる可能性がある」と注意を呼び掛けている。

気象庁によると、両日の地震はいずれも震央が本県津軽南部（北緯40・6度、

東経140・4度）で、震源の深さは10⁺程度。地震の規模（マグニチュード）は2・8〜3・7で、最大震度は3だった。

前田教授は群発地震について「長さ数百メートルの断層が数センチ動いたことで内陸地震が発生した。いずれも震源の深さ10⁺程度と浅かったため、局所的に揺れが大きくなった。しかし、規模としては小さい」とし、気象庁の監視や弘前大の研究を踏まえ「地震活動が活発になっていった地域で発生した」と説明した。

岩木山周辺で起きたことについて「岩木山は活火山。断定はできないが、火山活動に（今回の地震が）影響している可能性もあるため、今後の地震活動を注視する必要がある」との見解を示した。

江戸時代に津軽地方で巨大地震が発生し甚大な被害を受けた歴史を振り返り、「地震はいつ起きるか分からない。命を守るためにも、日ごろからの備えや対策を再確認してほしい」と話した。

（稲葉智絵）

※この画像は当該ページに限って
陸奥新報社が利用を許諾したものです。
[問合せ先]弘前大学理工学研究科
E-mail:r_koho@hirosaki-u.ac.jp